老人ホームにおける動物の飼育状況調査

升 秀夫^{1)†}熊坂 隆行²⁾

1) 筑波大学医療技術短期大学部 (〒305-8577 つくば市天王台1-1-1)

2) 筑波大学付属病院看護部 (〒305-8576 つくば市天久保2-1-1)

(2000年7月25日受付・2000年11月30日受理)

要 約

老人ホーム72施設を対象に、動物の飼育状況についてアンケート調査を行った。動物を飼育する老人ホームでは、利用者のquality of lifeの向上を目的とする施設が多かった。動物の飼育を行わない老人ホームでは、飼育の負担、設備の未整備、人獣共通感染症に留意している施設が多かった。動物介在活動ボランティアの受け入れを希望する老人ホームは、調査した72施設のうち30施設であった。——キーワード：動物飼育、老人ホーム。

----- 日獣会誌 54, 485～488 (2001)

高齢化社会を迎え、老人ホームにおいても高水準のquality of life (QOL) を維持し老後を過ごす環境が求められている。高齢者のQOLは老人の健康状態や生活環境に加え、高齢者自身による満足感や幸福感など心理的状态や精神健康とも密接に関連する [2, 4, 7-9]。近年、老人ホームでも入居者のQOLを高める目的や医療行為の一部としてリハビリを促進する目的などに、動物を介在させる手法が実践されている。病院や老人ホーム、心身障害者福祉施設での動物の介在は、animal assisted therapy (動物介在療法) と animal assisted activity (動物介在活動) の定義に基づき、わが国では日本動物病院福祉協会などでボランティア活動が行われている [13]。この活動は病院の入院患者、心身障害者施設や老人ホームと、それぞれの施設の形態や目的、対象者の健康状態などにより実施方法が異なると考えられる。Baunら [1] のようにコンパニオンアニマルの介在による血圧調整などへの有効性について報告しているものがあるが、一方では老人ホームにおいて動物を利用者に介在させることは、動物嫌いや設備の問題、利用者の動物への反応によって動物に苦痛を与えるなど、動物福祉や愛護の観点からの問題が指摘されており [3]、その評価が定まっていない。これは老人ホームでの動物の飼育状況とその目的、動物介在療法の理解や実施状況、介在動物を伴い施設を訪問する動物介在活動ボランティアの受け入れ希望など不明点が多いことも評価の定まらない要因と思われる。本調査では老人ホームでの動物の飼育状況を調べ、動物介在療法ならびに動物介在活動の

適正な手法を見いだすための参考となることを目的とした。

方 法

今回は特別養護老人ホームならびに老人保健施設、養護老人ホームと有料ホームにおける動物の飼育や動物の管理状況、動物を老人ホームで飼育した場合の利用者への影響について調査した。平成9年5月～平成10年1月に、無作為抽出した茨城県南西部、栃木県南部、千葉県東部に所在する特別養護老人ホーム、老人保健施設、養護老人ホーム、有料老人ホーム72施設を訪問し、聞き取りアンケート方式での調査を実施した。調査した茨城県南西部ならびに栃木県南部は、稲作、蔬菜類、果樹、畜産が盛んであり、工業団地、農家集落、造成住宅地が散在する。千葉県東部は海岸線を有し漁業を主要産業とする地域と、蔬菜、稲作、畜産を主体とした農業が盛んな地域とからなるが、最近では工業団地や住宅地が増加する傾向にある。本地域の老人ホームは、農耕地、工業団地、住宅地から離れた丘陵に立地し、環境に恵まれている施設が多い。調査では動物を飼育する老人ホームについては、動物飼育を担当する職員から聞き取りを行い、動物の飼育が行われていない老人ホームでは、利用者の健康管理を担当する看護職員または介護職員から聞き取りを行った。調査内容は①動物の飼育の有無、②飼育されている動物種、③飼育目的、④飼育作業に携わる人、⑤利用者や職員への影響、⑥動物介在活動ボランティアへの要望についてであった。なお、老人ホームは、

† 連絡責任者：升 秀夫 (筑波大学医療技術短期大学部)

〒305-8577 つくば市天王台1-1-1 ☎0298-53-3415 FAX 0298-53-3411

医療看護を必要とする高齢者が入居する特別養護老人ホーム、養介護とリハビリを加え高齢者の保護を目的とした養護老人ホーム、有料老人ホームなどの共同生活施設と、おもにリハビリを目的とした老人日帰り介護施設、老人介護支援センターなど、利用者の年齢、介護の必要性、生活基盤の条件により利用する施設内容が異なる。今回は、健康高齢者が生活に不安を持ち養護を目的として戸別に入居する軽費老人ホームや老人日帰り介護施設、老人介護支援センターについては業務形態を考慮し調査対象から除外した。

成 績

動物を飼育していた老人ホームは調査した72施設のうち28施設（39％）であった。飼育動物の種類は水槽や池で飼育される観賞魚が多く、他は、犬、ハムスター、猫、観賞鳥、産卵鶏、山羊あるいは兎であった（表1）。動物の飼育理由は利用者のQOLの向上を目的とする施設が最も多く15施設（54％）であり、職員が動物好き、職員の精神安定を得るためと答えた施設も10施設（36％）あった。また、動物介在活動や動物介在療法を意図して動物を飼育する施設は3施設（11％）であった（表2）。給餌・給水を職員が行う施設が10施設（36％）、または職員と利用者が共同で行う施設が14施設（50％）であった。排泄物の処理は職員が行う施設が18施設（64％）、利用者と職員が共同して行う施設が8施設（29％）であった。また、これら作業を終えた後の処置として手指の消毒を行う施設は20施設（71％）

表1 老人ホームの動物飼育状況と飼育されていた動物種

動物飼育の有無と動物種	施設数
有	28 (39%)
無	44 (61%)
観 賞 魚	16
犬	8
ハムスター	6
猫	4
観 賞 鳥	3
産 卵 鶏	2
山 羊	1
兎	1

注：1）所有者不明の犬および猫は除く、2）動物種は重複回答あり。

表2 動物を飼育している老人ホームの飼育目的

飼育目的	施設数
利用者QOLの向上	15 (54%)
職員が動物好き	6 (21%)
職員の精神安定	4 (14%)
動物介在活動	2 (7%)
動物介在療法	1 (4%)

であった（表3）。

動物を飼育して利用者に有益と思われる項目としては、利用者の情緒性の改善による精神安定が認められるとの回答が最も多かった。そのほかに、利用者の単独行動や孤立性の改善により生きがいの向上が認められた、利用者のいさかいの軽減や解消により集団生活の安定が得られた、動物飼育の共同作業により利用者の他の作業への積極的な参加など生活意欲の向上などが認められたとする回答も得られた。利用者への不利益と思われる項目としては、動物から受ける病気・傷害、動物の死による利用者へのショックなどペットロスを指摘する回答が多かった。施設運営へのマイナス面として、①飼育を担当する職員の業務負担、②施設の衛生状態の悪化、③動物の繁殖による飼育の経済負担、④獣医療費の負担があげられた（表4）。動物飼育をしていない44施設に、将来における動物飼育の希望の有無を質問したところ12

表3 動物を飼育する老人ホームの飼育作業

飼育作業	施設数
給餌・給水	
利用者のみ	4 (14%)
職 員のみ	10 (36%)
利用者と職員	14 (50%)
排泄物処理	
利用者のみ	2 (7%)
職 員のみ	18 (64%)
利用者と職員	8 (29%)
飼育作業後の処置	
排泄物消毒	5 (18%)
着 替 え	1 (4%)
手 指 消 毒	20 (71%)
手洗いのみ	2 (7%)

表4 動物飼育老人ホームの利用者および職員・施設への影響

影 響	施設数
良好と思われる影響	
精 神 安 定	18
生 活 の 安 定	6
生きがいの向上	8
行動範囲の拡大	2
生活意欲の向上	4
感情が豊かになる	2
悪いと思われる影響	
動物から受ける病気・傷害	14
動物の死（ペットロス）	8
利用者の人間関係（独占欲）	4
多種・多数の動物飼育を望む	1
職員・施設への影響	
職員の飼育業務負担	7
施設の衛生状態の悪化	5
動物の繁殖による経済負担	2
動物の医療費の負担	2

注：1）複数回答あり、2）利用者からの回答は含まれない。

表5 動物飼育を行わない老人ホームの状況

飼育希望のある施設	12 (27%)
職員の動物管理負担	8
飼育場所・飼育方法に不安	5
動物から受ける病気・傷害	5
動物飼育による経済負担	3
入居者・職員の動物嫌い	2
飼育希望のない施設	32 (73%)
動物からの病気・傷害 (迷い犬・猫)	22
飼育場所の未整備	14
入居者・職員の動物嫌い	10
職員の動物管理負担	7
動物飼育による経済負担	3
動物介在効果に疑問がある	3
動物介在活動ボランティア受け入れ	3

注：項目は重複解答あり。

表6 動物介在活動ボランティアの受け入れ希望

受け入れ	施設数
希望する	27 (38%)
実績あり	3 (4%)
未検討	30 (42%)
不必要	12 (17%)

施設 (27%) が飼育を希望し、32 施設 (73%) が希望しなかった (表5)。飼育を希望する施設で動物を飼育していない理由としては、職員の動物管理負担、飼育設備の未整備、動物から受ける病気や傷害を心配するなどが多かった (表5)。動物の飼育を行う考えのない施設では、施設的环境未整備、利用者・職員の動物嫌い、動物介在の効果への疑問、すでに動物介在活動ボランティアを定期的に受け入れているので飼育の必要はないなどの回答が得られた。動物から受ける病気・傷害を懸念する理由としては、利用者が施設に迷い込んだ野犬や飼い主不明の猫に残飯や菓子を与え、施設内に入れることで起きる事故を指摘する回答が多かった (表5)。調査した72 施設すべてに、動物介在活動を行うボランティアの受け入れ希望について質問した結果、ボランティアをすでに受け入れている施設は3 施設 (4%)、受け入れを希望している施設は27 施設 (38%)、未検討の施設は30 施設 (42%)、不必要と判断した施設は12 施設 (17%) であった (表6)。

考 察

本調査では治療、看護あるいは介護を必要とする利用者の多い特別養護老人ホームから自立生活が可能な利用者が生活を送る有料老人ホームまで広範囲に調べた。厚生省によれば、全国の老人ホーム数は6,260 施設で、前年に比べ405 施設 (7%) 増加している。増加した施設は特別養護老人ホーム229 施設 (6%) および軽費老人

ホーム (介護利用型) 171 施設 (27%) であるが、有料老人ホームは減少傾向にあった [5]。

老人ホームにおける動物の飼育状況を調べた結果、観賞魚を飼育する水槽あるいは施設内に鯉や金魚を飼育する池をもつ老人ホームが多く、哺乳動物を飼育する施設は少数であることが明らかになった。哺乳動物の飼育では、犬や猫を飼育している施設が12 施設あった。また、産卵鶏や山羊を飼育する施設もあった (表1)。これは、調査した施設が農漁村に隣接した立地条件にあり、犬や猫、鶏や山羊を飼育しやすい環境にあることが影響しているのではないかと考えられた。今後は、都市部やその近郊の施設を調査して比較検討する必要があると思われる。

動物を飼育している施設での飼育目的は、利用者のQOLの向上を目的とする施設が最も多く、また、動物介在活動や動物介在療法の効果を期待して動物を飼育する施設も3 施設あった (表2)。職員の動物好き、職員の精神安定のために動物を飼育する施設も存在したが、これは職場で動物を飼育する企業 [12] などの例に類似するものと考えられた。動物への給餌・給水は利用者と職員が共同で行う施設が多く、排泄物処理も職員が行う施設が多かった (表3)。このことは、飼育動物への適正な給餌・給水や衛生管理への配慮がおおむね行き届いていると思われる。動物の飼育による好影響として、動物介在療法や動物介在活動の効果 [13] と考えられる回答 (表4) が得られたが、これらは看護職員あるいは介護職員による評価であり、QOL 評価の主体者は利用者であることから必ずしも万全な評価結果ではない。したがって、高齢者の動物嫌いや無関心である問題点 [12] も含めて、心理的效果や治療の援護、高齢者の社会的支援 (ソーシャルサポート) [4] などを考慮し、老人ホーム利用者を対象とした調査が必要であると思われる。

動物飼育を希望しながらも飼育できない施設においては、職員の動物管理負担、飼育場所や飼育方法に不安がある、あるいは動物から受ける病気・傷害を危惧するなどの回答が多かった。さらに動物飼育の希望のない施設では、施設に迷い込んだ犬や猫に利用者が接触することによる人獣共通感染症を懸念する施設が多かったことから、これらの諸問題に関して適切なアドバイスが行える獣医師の関与、ならびに保健所勤務獣医師と保健婦との協力体制の必要性が感じられた。

動物介在活動ボランティアの受け入れを希望する施設は27 施設であり、すでに受け入れた実績のある施設を加えるとほぼ半数の施設が動物介在活動ボランティアに関心を示していた。この点に関しては、全国的な調査やわが国の国民性を配慮した動物介在活動指針などの検討が必要であると思われる。軽費老人ホームは増加傾向にある [5] が、土倉ら [11] の調査では、独居老人で犬

や猫を飼育する人の76%が精神的効果があると答えている。したがって、老人ホーム入居前に飼育していた動物との同居やコンパニオンアニマルの飼育を希望する高齢者も多く存在するのではないかと推測された。今後は、在宅要介護老人と特別養護老人ホームや軽費老人ホーム入所者における生活背景の特性〔6〕を考慮した調査を行い、感情的人工生物の機能を有する動物型ロボットであるメンタルコミットロボット〔10〕などの併用も含め、老人ホームでの適正な動物介在ボランティア活動の育成が必要であると思われる。

引用文献

- 〔1〕 Baun MM, Bergstrom N, Langston NF, Thoma L : Nurs Res, 33, 126-129 (1984)
- 〔2〕 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 柴崎智美, 永井正規, 川上憲人, 五十里 明, 尾島俊之, 大野良之: 日本公衛誌, 44, 760-767 (1997)
- 〔3〕 林 良博: 検証アニマルセラピー, 130-146, 講談社, 東京 (1999)
- 〔4〕 岸 玲子, 江口照子, 笹谷春美, 矢口孝行: 日本公衛誌, 41, 474-487 (1994)
- 〔5〕 厚生省: 厚生白書1998, 445-452, ぎょうせい, 東京 (1998)
- 〔6〕 黒田研二, 趙 林, 岡本悦司, 高鳥毛敏雄, 新庄文明, 多田羅浩三: 日本公衛誌, 39, 215-221 (1992)
- 〔7〕 長田久雄, 柴田 博, 芳賀 博, 安村誠司: 日本公衛誌, 42, 897-908 (1997)
- 〔8〕 中西範幸, 西岡千里, 山田敦弘, 木本絹子, 卯津羅祥子, 青木美憲, 米田英夫, 長野 聖, 多田羅浩三: 日本公衛誌, 44, 845-853 (1997)
- 〔9〕 中西範幸, 多田羅浩三, 中島和江, 高井弘の, 樽村裕美, 高橋進吾, 井田 修, 村上茂樹, 高鳥毛敏雄: 日本公衛誌, 44, 89-99 (1997)
- 〔10〕 柴田崇徳, 日本ロボット学会誌, 17, 943-946 (1999)
- 〔11〕 土倉義史, 野田邦広, 東 正秋, 加藤雅彦, 小林知也, 梶原則夫, 遠藤和雄: 日獣会誌, 51, 265-266 (1998)
- 〔12〕 横山章光: アニマル・セラピーとは何か, 41-71, 日本放送協会, 東京 (1996)
- 〔13〕 横山章光, 大澤あかね, 野村総一郎, 柴内裕子: 精神科治療学, 11, 491-498 (1996)

Survey of Animal Breeding in Nursing Homes for the Aged

Hideo MASU[†] and Takayuki KUMASAKA

College of Medical Technology and Nursing, University of Tsukuba, Tsukuba science city 305-8577, Japan

SUMMARY

A questionnaire survey was conducted of animal breeding in 72 nursing homes for the aged. Numerous institutions breed animals with the aim of improving, inmates' quality of life. Many of the institution conducting no such programs cited as reasons concern with the burden of animal breeding, insufficient, equipment, and the danger of zoonotic infection. Of the 72 institutions surveyed, 30 expressed hope of calling on volunteers in animal-assisted activities. — Key words : animal breeding, home for the aged.

[†] Correspondence to : Hideo MASU (College of Medical Technology and Nursing, University of Tsukuba)

Tsukuba science city 305-8577, Japan TEL 0298-53-3415 FAX 0298-53-3411

J. Jpn. Vet. Med. Assoc., 54, 485 ~ 488 (2001)